

病の人間学の一考察

—— 正岡子規を事例に ——

小 泉 博 明

1. はじめに

人間とは苦しみ悩む存在であり、まさにホモ・パティエンス（病む者）である。生きているとは、死の前の人間であり、死への存在である。健康に対して病気というが、それでは完璧に健康な人間などいるのであろうか。人間は誰もが病気を持ち、病気と共存しながら生きているのである。人間は病苦から逃げられない。たとえ健康であると思っても、病気になる可能性をもった存在であることを忘れてはならない。よって、健康とは正常であり、病気とは異常であるという単純な類型化はできないのである。

現代はヘルシズム（健康至上主義）が支配的であり、健康を保持し増進するために、ダイエットやジョギングに熱心に励み、ダイエットのための健康食品やサプリメントを購入する。最終的には「健康のためならば死んでもかまわない」ということにもなりかねない。また抗菌、無臭ブームでもあり、ドラッグストアの店頭には抗菌グッズが並び、無菌そして無臭状態へと一步でも前進しようとする。だが却って、皮肉なことに人間にとって、病気に対する無防備な状況をつくりあげ、細菌への抵抗力を喪失しかねない。また、疑似体験のゲームでは、動物の「臭い」もなければ、サッカーや野球で転倒しても、「痛み」がない。まして、怪我をしても出血することもない。「臭い」や「痛み」から遠ざかるほど、それに比例して、他者との関係性を喪失し、他者の痛みがわからなくなるのである。

若者には共通話法があるという。「これはパソコンです」といわずに「私的には、これはパソコンじゃあないですか」という。「じゃあ（断定）ない（否定）です（肯定）か（尋ね）」という形で、自分の断定を自分で否定して見せながら、でも最後には自分の意志を出す。相互の意志をストレートに出すのではなく、和らげながら出すという若者の巧妙な交渉術が読みとれる⁽¹⁾。あるいは、近頃よく耳にする「よろしかったでしょうか」も同様であろう。これらは決して「優しさ」ではなく、対立を回避し、自らが脆弱性、傷つき易い（vulnerable）場に身を置かないための潜在的な自己防衛の姿なのであろう。あるいは、「怒り」をあらわす言葉として、「キレル」という。そこから派生して「逆ギレ」という。これは、怒ることにより、他者と繋がっていた関係性を断ち切りたいという思いから発せられる。立川昭二の「からだことば」⁽²⁾によれば、かつて怒ることは「腹が立つ」といい、さらに「頭に来る」といっていた。

さて、健康とは何かというときさまざまな定義がある。WHO（世界保健機構）が1946年に採

択した世界保健憲章には、“Health is a state of complete physical, mental and social well-being, not merely absence of disease or infirmity.”とあり、ただ単に疾病や虚弱が存在しないことではないとある。それでは、病気とはどのように定義できるのであろうか。吉松和哉によれば「病い」「病気」「疾患」の3つの段階があるとする。「まず『病い』がある。英語では sickness と言われているが、『患い』と言ってもよいかもしれない。すなわち患者は主観的にいつもと違う心身にわたる違和感を味わう。(中略)次に『病気』の段階がある。これはさしずめ英語では illness ということになろう。すなわち病人として社会的に認知された状態である。(中略)最後に『疾患』がある。これは英語で言えば disease であり、ドイツ語の Krankheit⁽³⁾で、まさに医学があってはいじめて成立する概念である」の3つである。

また、野口祐二は「『病い』は病気の個人的な意味、個人的な経験をあらわす言葉であり、これに対して、『疾患』は病気の生物学的側面をあらわす言葉である。(中略)また、『疾患』はいつの時代でもどこの国でも見出すことができる(はずである)が、『病い』は時代や地域によって異なったかたちで認識されたり意味付けられたりするものとしてとらえられる⁽⁴⁾」という。病気には、その個人の属している社会の広がりや、歴史の重みのなかで、考えなければならない側面もある。病気や病名が「象徴的な意味」をもち、病気本来の姿を離れ、社会的な意味をもって一人歩きし、社会的差別や偏見の対象となったりする。これをスーザン＝ソング⁽⁵⁾は「隠喩としての病」といい、結核とガンという2つの病気がもつ隠蔽された意味について解説した。さらには、病気に対する偏見や過大な恐怖心から、病者を排除し差別するという、病者への否定的な眼差しがある。さらに、野口は精神科医で医療人類学者のクライマンの言葉を引用し、「患者は彼らの病いの経験を、つまり自分自身や重要な他者にとってそれがもつ意味を、個人的なナラティブとして整理するのである⁽⁶⁾」とし、「病いも物語のかたちで存在している」とする「病いのナラティブ」を提示する。

最近の現代医療の問題点が指摘されるなかで、「医者は病気を診るが、病人を診ない」といわれる。医者は患者に「どうしたのですか」ではなく、「どこが具合悪いのですか」と問いかける。これは、医療技術が進歩するに従い、医者は患者ではなく疾患(臓器)のみに注目し、検査結果のデータのみに依存するという弊害が惹起しているのである。また、家族の外部化が進み、生老病死のいずれもが家庭から乖離し病院での出来事となっているという。さらに、「人格としての患者」「消費者としての患者」の権利が叫ばれ、医療におけるパターンリズムの反省が起こり、医者の患者に対するインフォームド・コンセントが浸透しつつある。

このような現代の病気をめぐる状況のなかで、人が病み、人が死に直面したときに、その人がどのように病気と向き合ってきたかを見ることで、その人の人間性や本質が顕在化する。たとえ風邪という病気であっても、「風邪」という病名のモデル・パターンがあるが、一人ひとりの風邪の症状が違う。本稿では、文学者ではなく、病者としての正岡子規にスポットをあて、子規の病気観や死生観について考察を試みる。

2. 子規と結核 — 病者へのまなざし

結核は、かつては肺病、癆咳、肺癆などと呼ばれ、不治の病いとして恐れられていた。1882年にコッホが結核菌を発見したことにより、それまでは遺伝によるものであると恐れられていた結核が伝染病であると確認された。日本の産業革命において、繊維産業の女子労働者である女工たちが大量に結核に罹患し、病み、衰え、若き生命を断たれたことが、横山源之助『日本之下層社会』や細井和喜蔵『女工哀史』などで生々しく語られている。結核に罹患すれば、特效薬もなく、肺組織の破壊に苦しみ、また痰を飲み込んで、腸への転移を惹起し、長期にわたる療養と漸次的な衰弱という経過をたどり、長く結核は「国民病」「亡国病」とも呼ばれていた。正岡子規をはじめ、樋口一葉、国木田独步、石川啄木、長塚節などの文学者も結核で斃れた。

なお、子規の併発した脊椎カリエス（結核性脊椎炎）とは、脊椎が結核菌におかされる肺結核からの二次感染である。病気が進行すると、脊椎が後方に突出し、脊椎のまわりの膿が筋肉の隙間をぬって、各所にたまり（流注膿瘍）、皮膚が赤くなり、熱をもって破れる症状となる。

子規は22歳で咯血し肺結核におかされたことを知り、35歳で急逝した。間歇的に来襲する激痛に悩まされ続け、肺結核から脊椎カリエスを併発し、とくに最後の数年間は病床での生活を余儀なくされ、身動きのできない状況であった。しかし、子規の創作活動は衰えることなく、死の直前の2日前まで創作に生きたのであった。

正岡^{のぼる}升は、咯血して正岡子規となった。それは、明治22年(1889)5月9日、22歳のときであった。「子規居士年譜」によれば「五月九日夜、突然咯血、翌日医師の診察を乞ひ午後集会の為九段に赴く。归来再び咯血。時鳥の句四五十を作る。咯血は一週間に亙り、咯血の量は一⁽⁷⁾回五勺位といふ。痰に血痕を存するは一箇月余に亙る」とある。すでに、予兆として前年の8月に友人と鎌倉に遊び、頼朝の墓から鎌倉宮に至る途中で血を吐いたことがある。咯血した夜に時鳥の句をつくった。ホトトギスは漢字で、時鳥、子規、不如帰などと書くが、口の中が赤く、その鳴き声をまねると血を吐いて死ぬという故事があり、結核の代名詞ともなっている。このときから咯血した自分をホトトギスに喩え、子規と号するようになった。松山生まれの子規は上京し、俳句と短歌の革新運動に邁進するが、明治27年2月に、終の栖となった下谷区上根岸町82番地に転居し、ここで晩年の病床生活を過ごした。その住まいは子規庵⁽⁸⁾と呼ばれるようになった。

子規には『松蘿玉液』『墨汁一滴』『病牀六尺』『仰臥漫録』という、4つの有名な病床随筆がある。『松蘿玉液』は明治29年4月21日から同年12月31日まで、『墨汁一滴』は明治34年1月16日から同年7月2日まで、『病牀六尺』は明治35年5月5日から同年9月17日まで書かれたもので、いずれも新聞「日本」紙上に連載された。とくに『病牀六尺』は、死の直前2日前まで書かれたものである。5月5日の冒頭はあまりにも有名である。

「病牀六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病床が余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事もできな

い。甚だしい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けない事がある。苦痛、煩悶、号泣、麻痺剤、僅かに一条の活路を死路の内に求めて少しの安楽を貪る果敢なき、それでも生きて居ればいひたい事はいひたいもので、毎日見るものは新聞雑誌に限つて居れど、それさへ読めないで苦しんで居る時も多いが、読めば腹の立つ事、癩にさはる事、たまには何となく嬉しくてために病苦を忘るるやうな事がないでもない。年が年中、しかも六年の間世間も知らずに寝て居た病人の感じは先づこんなものですと前置きして」⁽⁹⁾と続く。

脊椎カリエスの間歇的な激痛に対し、「苦痛、煩悶、号泣」となり、その激痛に耐えかねて「麻痺剤」を投与し、一時的な安佚をむさぼるが、数日後には「苦痛、煩悶、号泣」が反復される。身体的な苦痛が除去されると同時に、精神は研ぎすまされていく。そして、しばしの安佚のなかで、「病床六尺」という狭い空間からのトリビアリズムは、日常の些事を鋭く観察し、筆をとり、記録し、絵を描き、日々を過ごしていく。日々の些事はもちろん、天候、そして何よりも毎食のメニューが丹念に「写生」される。また、凄まじい、まさに餓鬼の如くの食欲に仰天する。一例を挙げるならば、明治34年9月21日の彼岸の入りの食事の内容を『仰臥漫録』に次のように記す。天候は昨夜から朝にかけて大雨で、夕方になり晴れてきた。

「朝 ぬく飯三わん 佃煮 梅干 牛乳一合ココア入 菓子パン 塩せんべい
午 まぐろのさしみ 粥二わん なら漬 胡桃煮付 大根もみ 梨一つ
間食 餅菓子一、二個 菓子パン 塩せんべい 渋茶 食過のためか苦し
晩 きすの魚田二尾 ふきなます二椀 なら漬 さしみの残り 粥三椀 梨一つ
葡萄⁽¹⁰⁾一房」

克明に記録された他日の食事の内容を見ても、1日3度の食事を欠かさず、飯か粥は1回につき3椀で、刺身や佃煮などの魚をよく食べ、それに野菜や果物、さらに牛乳にはココアを入れ、菓子パンや煎餅などを食べている。寝たきりで、十分な運動もできないながらも、異常なまでの食欲、そして食べ過ぎのため苦痛にあえいでも、子規は食べ続ける。食べることが、まさに子規にとって生きる証なのである。

さて6月20日には、『病床六尺』に次のように記す。

「病床に寝て、身動きの出来る間は、敢て病気を辛しとも思はず、平気で寝転んで居たが、この頃のやうに、身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起して、殆ど毎日気違のやうな苦しみをやる。この苦しみを受けまいと思ふて、色々工夫して、あるいは動かぬ体を無理に動かして見る。いよいよ煩悶する。頭がムシャムシャとなる。もはやたまらるので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。絶叫。号泣。ますます絶叫する、ますます号泣する。その苦その痛何とも形容することは出来ない。むしろ真の狂人となつてしまへば楽であらうと思ふけれどそれも出来ぬ。もし死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである、しかし死ぬことも出来ねば殺してくれるものもない。一日の苦しきは夜に入ってやうやう減じ僅かに眠気さした時にはその苦痛が終わると共にはや翌朝寝起の苦痛が思ひやられる。寝起ほど苦しい時はないのである。誰がこの苦を助けてくれるものはある

まいか、誰かこの苦しめてくれるものはあるまいか。」⁽¹¹⁾

ここでも「絶叫」「号泣」を反復し、呻吟し痛哭する。さらに「誰かこの苦しめてくれるもの」を悲痛な叫びで求める。いま、ここに横臥している病者は、ありのままの子規そのままである。

また、『仰臥漫録』は3つの病床随筆とは異なり、公表する意図もなく書かれたもので、明治34年9月2日から明治35年3月12日まで続き、その後は「痲痺剤服用日記」となる。子規は明治34年に、自らの病状を『仰臥漫録』で次のように記す。少し長くなるが引用する。

「十月廿六日 晴 この頃の容体及び毎日の例

病気は表面にさしたる変動はないが次第に体が衰へて行くことは争はれぬ。膿の出る口は次第にふえる、寐返りは次第にむつかしくなる、衰弱のため何もするのがいやでただぼんやりと寐て居るやうなことが多い。

腸骨の側に新に膿の口が出来てその近辺が痛む、これが寐返りを困難にする大原因になって居る。右へ向くも左へ向くも仰向になるもいづれにしてもこの痛所を刺激する、咳をしてもここにひびき泣いてもここにひびく。

繃帯は毎日一度取換へる。これは律の役なり。尻のさき最痛く僅に綿を以て拭ふすらなほ疼痛を感じる。背部にも痛き箇所がある。それ故繃帯取換は余に取つても律に取つても毎日に一大難事である。この際に便通ある例で、都合四十分乃至一時間を要する。

肛門の開閉が尻の痛所を刺戟するのと腸の運動が左腸骨辺の痛所を刺激するのとで便通が催された時これを猶予するの力もなければ奥の方にある尿をりきみ出す力もない。ただその出るに任するのであるから日に幾度あるかも知れぬ。従つて家人は暫時も家を離れることが出来ぬのは実に気の毒の次第だ。

睡眠はこの頃善く出来る。しかし体の痛むため夜中幾度となく目をさましてはまた眠るわけだ。

齒齦から出る膿は右の方も左の方も少しも衰へぬ。毎日幾度となく綿で拭ひ取るのであるが体の弱つて居る日は十分に拭ひ取らずに捨てて置くこともある。

物を見て時々目がちかちかするやうに痛むのは年来のことであるが先日逆上以来いよいよよつよくなつて新聞などを見ると直に痛んで来て目をあけて居られぬやうになつた。それで黒眼鏡をかけて新聞を読んで居る。

朝夕湯婆たんぽを入れる。熱出ぬ。小便には黄色の交り物あること多し。

食事は相変らず唯一の樂であるがもう思ふやうに食はれぬ。食ふとすぐ腸胃が変な運動を起して少しは痛む。食ふた者は少しも消化せずに肛門へ出る。(中略)

齒は右の方にて噛む。左の方は痛くて噛めぬ。

朝起きてすぐ新聞を見ることをやめた。目をいたはるのぢゃ。人の来ぬ時は新聞を見るのが唯一ひまつぶしぢゃ。

食前に必ず葡萄酒(渋いの)一杯飲む。クレオソートは毎日二号カフセルにて六粒。」⁽¹²⁾とあ

る。

子規の病状が詳細に赤裸々に綴られている。病床に寝たきりであるが、日々の生活として食事や睡眠も、そして便通も、さらには繻帯取換へもある。繻帯取換へに1時間も要するということで、疼痛の凄まじさが伝わる。また、歯茎からも膿が出る。子規の唯一の楽しみであり、生きている証でもあった食事でも徐々に食欲が衰えていき、消化不良を起こすようになる。なお、クレオソートには消化管内の異常発効を抑制するはたらきがある。そして、あまりにも苦痛に耐えられず、次のような「自殺熱」が起こり実行を企てようとする。

「十月十三日 大雨恐ろしく降る 午後晴

さあ静かになつた この家には余一人となつたのである余は左向に寝たまま前の硯箱を見ると四、五本の秃筆一本の検温器の外に二寸ばかりの鈍い小刀と二寸ばかりの千枚通しの錐はしかも筆の上にはあらはれて居る さなくとも時々起らうとする自殺熱はむらむらと起つて来た 夫は電信文を書くときにはやちらとしてゐたのだ しかしこの鈍刀や錐ではまさかに死ぬぬ 次の間へ行けば剃刀があることは分つて居る その剃刀さへあれば咽喉を搔く位はわけないが 悲しいことには今は匍匐ふことも出来ぬ 已むなくんばこの小刀でものど笛を切断出来ぬことはあるまい 錐でも心臓に穴をあけても死ぬるに違ひないが長く苦しんで困るから穴を三つか四つかあけたら直に死ぬるであらうかと色々考へて見るが夫は恐ろしさが勝つのでそれと決心することも出来ぬ 死は恐ろしくはないのであるが苦が恐ろしいのだ 病苦でさへ堪へきれぬにこの上死にそこなふてはと思ふのが恐ろしい そればかりでない やはり刃物を見ると底の方から恐ろしさが湧いて出るやうな心持ちもする 今日もこの小刀を見たときにむらむらとして恐ろしくなつたからじつと見てみるとともかくもこの小刀を手を持つて見ようとまで思ふた よつぽど手で取らうとしたがいよいよここだと思ふてじつとこらえた心の中は取らうと取るまいとの二つが戦つて居る 考へて居るうちにしやくりあげて泣き出した その内母は帰つて来られた⁽¹³⁾」とある。

子規は「死は恐ろしくはないのであるが苦が恐ろしいのだ」という。この日は手に取り、自殺しようとした小刀と千枚通しのスケッチが描かれている。絶叫、号泣そして逆上、激昂の反復のなかで、体力も少しずつ衰えていく。苦から逃げ出し、苦から解放されるのは死であると、死への誘惑に傾きかけ煩悶する。子規の心模様が肉声となって聞こえてくる。

子規と漱石とが初めて出会ったのは、明治22年1月であった。第一高等中学校（後の一高）の同級生で、寄席の趣味を通して親しくなったという。それ以来、終生変わらぬ交友関係が続いた。子規と漱石の往復書簡のなかに、明治33年2月12日（月）付けて、子規から親友の漱石へ宛てた病苦への赤裸々な告白が書かれているものがある。

下谷区上根岸町八十二番地 正岡常規より 熊本市内坪井町七十七番地 夏目金之助へ
「例の愚痴談だからヒマナ時に読んでくれ玉へ。人に見せては困ル、二度読マレテハ困ル。」
冒頭が、このような書き出しで始まり、小包で漱石より送られてきた金柑へのお礼と続く。
「現ニ只今モサシタル熱ガナイヤウダカラ原稿書カウ徹夜デモスルゾト大奮発シテ先ヅ浣腸

ト繻帯取替トヲスル（コノ二事が老妹日々ノ大役ダ）平生ナラバ小生ハ浣腸後少シ疲労スルノミニテ、ムシロ安心スルケレド体ニ申分アルトキ、マタハ痔疾ニ秘結ナドトクルト後へモ先へモ行カヌコトガアル。（中略）

夕方マデ来客絶エズタ飯スミテ浣腸、繻帯替（コノ二ツガ同時ニ行ハネバナラヌ事故下痢症ニ掛ツタトキハ何トモ致方ナク非常ノ困難ヲ窮メ候。コノ時ハ浣腸ハ不用ナレド『サア糞ガシタイ』トイフテカラ尻ノ繻帯ヲ取りハヅシお尻ヲ据エル迄ニ早クテ五分、遅クテ十五分ヲ要シ候。ソノ五分乃至十五分間糞ヲコラエル苦ハ昨年始メテ経験致候 屎ヲスル際ニ時々貴兄が兄上ノ糞ヲトラレタトイフ話ヲ思ヒ出シ候）コノ浣腸繻帯替スミ、イザ原稿トイフ処デ咳、ソコデコノ手紙ト、カウイフ都合デ、此後デ原稿出来ルカ出来ヌカガ問題ナリ。（中略）……………⁽¹⁴⁾……………（コノ間落泪）」

これほどまでに隠蔽することなく、自らの病身を漱石へさらけ出し、病苦の呻吟を訴えている。当然ながら、朋友としての漱石への信頼が深いからであろう。しかし、自らの恥部までも怜悧に「写生」しようとする姿は、ユーモラスなまでに描かれ、杉田玄白の自虐的ともいえる冷徹な目で老残の身を自己解剖している『耄耋独語』を想起させる。子規にとって肉体が死すとも、強靱な精神で創作を続けさせたエネルギーは、旺盛な創作欲とストイックな写生探求ではなからうか。

3. 妹の律の看護 — 子規に見る看護（ケア）とは

人は不治の病気となったときに、死を覚悟した患者とならざるをえない。しかし、一人の病者として死んでいくものではない。病者には、病者自らだけでなく、医者や病者に寄り添い看護する者や家族などの他者が側にいるのである。小松美彦のいう「死は共鳴する」⁽¹⁶⁾ではないが、病者は他者との心の交流のなかで生きている。作家の中井英夫の逸話に、病床で自分に寄り添ってかいがいしく世話する人に向かって、ほとんど遺言のように「わかった。死とは死んだら、残された者の心の中に行くんだ」といったという。人は死後に地獄や極楽あるいは天国へ、または土に帰るのではなく、「残された者の心の中」に行くというのは、現代の医療、そして病者について考える上で、大きな示唆に富む言葉ではないだろうか。⁽¹⁷⁾

医療におけるケアが、大きな話題となっているが、紙幅の関係もあり、ここは論ずる場ではない。とはいえ、他者との共生において、「配慮・世話する」を意味するケアがキーワードとなっている。広井良典は「人間は誰しも『ケア』する対象を求めずにはおられないし、また自分が『ケアされる』ことを欲する。その意味では、人間とは『ケアする動物』である、とすら言ってもよい生き物なのである」⁽¹⁸⁾という。人間は病む者であるが、ケアする動物でもあるのである。病むこととケアすることを考察するに、子規と妹の律との間における看護、ケアする関係は恰好の事例といえよう。

さて、肺結核から脊椎カリエスを併発し、寝たきりの生活を余儀なくされた子規の看護と衣食住の世話をしたのが、3歳年下の妹の律であった。子規は妹に対し、深甚なる感謝の気持ち

を抱きながらも、身体が自由がきかない苛立たしさから、『仰臥漫録』には、妹への不満を辛辣なまでに、記している。少し長い引用となるが、死の前年の明治34年の内容である。

「九月二十一日（中略）律は強情なり 人間に向つて冷淡なり 特に男に向つて shy なり 彼は到底配偶者として世に立つ能はざるなり しかもその事が原因となりて彼は終に兄の看病人となりをはれり もし余が病後彼なかりせば余は今頃如何にしてあるべきか 看護婦を長く雇ふが如きは我能く為す所に非ず よし雇ひ得たりとも律に勝る所の看護婦即ち律が為すだけの事を為し得る看護婦あるべきに非ず 律は看護婦であると同時にお三どんなり お三どんであると同時に一家の整理役なり 一家の整理役であると同時に余の秘書なり 書籍の出納原稿の浄書も不完全ながら為し居るなり しかして彼は看護婦が請求するだけの看護料の十分の一だも費さざるなり 野菜にても香の物にても何にても一品あらば彼の食事はをはるなり 肉や魚を買ふて自己の食料となさんなどは夢にも思はざるが如し もし一日にても彼なくば一家の車はその運転をとめると同時に余は殆ど生きて居られざるなり 故に余は自分の病気が如何ように募るとも厭はず ただ彼に病なきことを祈れり 彼あり余の病は如何ともすべし もし彼病まんか彼も余も一家もにつちもさつちも行かぬこととなるなり 故に余は常に彼に病あらんよりは余に死あらんことを望めり 彼が再び嫁して再び戻りその配偶者として世に立つこと能はざるを証明せしは暗に兄の看病人となるべき運命を持ちしためにやあらん 禍福錯綜人智の予知すべきにあらず（中略）

彼は癩癩持なり 強情なり 気が利かぬなり 人に物問ふことが嫌ひなり 指さきの仕事は極めて無器用なり 一度きまつた事を改良することが出来ぬなり 彼の欠点は枚挙に遑あらず余は時として彼を殺さんと思ふほどに腹立つことあり されどその実彼が精神的不具者であるだけ一層彼を可愛く思ふ情に堪へず 他日もし彼が独りで世に立たねばならぬときに彼の欠点が如何に彼を苦むるかを思ふために余はなるべく彼の癩癩性を改めさせんと常に心がけつつあり 彼は余を失ひしときに果して余の訓戒を思ひ出すや否や

病勢はげしく苦痛つるに從ひ我思ふ通りにならぬために絶えず癩癩を起し人を叱す 家人恐れて近づかず 一人として看病の真意を解する者なし⁽¹⁹⁾

吉松和哉は、医療現場における「甘え」を、土居健郎の「甘えの構造」の分析をもとに「人間は病気になり、病人になると、一種の退行現象をおこして、甘えを表現しやすくなる⁽²⁰⁾」と指摘する。病者は医者の前では自制的となっているが、家人に対しては、自制から解放され苦痛などを愁訴しやすくなり、とくに病床の寝たきりの不自由なる生活では、その愁訴は一層加速されることになる。病気になり、病人になることで、「甘え」という依存欲求によりまさに嬰兒へと立ち返り、その人に裝飾されていたものが剥離されたエゴイズムが開示され、その人本来の人間性を垣間見ることもできるのである。

子規の場合も、激痛を愁訴し、「甘え」をいうことができるのは妹の律や母親の八重だけであつた。当時の儒教的な倫理からするならば、苦痛に克己することが一人前の大人としての気風であると推察されるが、子規にとって、苦痛の臨界に到達した耐えがたい激痛を、とくに妹

に向けて、その激痛の不満を一挙に痲癩玉として破裂させる結果となったのである。妹に浴びせた罵声は、子どもの喧嘩での常套句のように「痲癩持」「強情」「気が利かぬ」「無器用」「改良できぬ」などと欠点の枚挙に遑がなく、さらには「殺さんと思ふほどに腹立つ」と尋常ならざる、かなり過激なものである。しかし、すぐさま妹を「可愛く思ふ情に堪えず」とあるアンビヴァレンスな心情を読みとれば、慈愛に満ちた子規の律への愛情を感じとらずにはいられない。子規の心情を吐露すれば、まさに〈痲癩〉と〈感謝〉の両極端を揺れる振り子のように振幅していたのである。

それでは、子規は病者への看護についてどのように考えていたのであろうか。『病牀六尺』の7月16日から18日までの3日間と、1日おいて20日に看護について論及している。⁽²¹⁾

まず、「看護の如何が病人の苦楽に大関係を及ぼすのである」とし、「傍の者が上手に看護してくれさへすれば、即ち病人の気を迎へて巧みに慰めてくれさへすれば、病苦など殆ど忘れてしまふ」という。反対に下手であるならば「病人は腹立てたり、痲癩を起したり、大声で怒鳴りつけたりせねばならぬ」という。さらに「女子の教育が病気の介抱に必要である」とし、「家庭の教育といふ事は、男子にも固より必要であるが、女子には殊に必要である」とまでいう。

また、病気の介抱には「精神的の介抱」と「形式的の介抱」とがあるとし、「形式的な看護人であってもどれだけ病人を慰めるかわからぬ」という。そして、子規は病者を看護することについて「病人を介抱すると言ふのは畢竟病人を慰めるのにほかならん」という。そして「看護人は先ず第一に病人の性質とその癖とを知る事が必要である。けれどもこれは普通の看護婦では出来る者が少いであらう。多くの場合においては母とか妻とか姉とか妹とか一家族に居つて平生から病人の痲癩の工合などを善く心得てゐる者の方が、うまく出来るはずである。うまく出来るはずであるけれども、それも実際の場合にはなかなか病人の思ふやうにはならぬので、病人は困るのである。(七月二十日)」⁽²²⁾とする。

このように妹の律の自らへの看病を想定しつつ、一般として「なかなか病人の思ふやうにはならぬので、病人は困る」と結論づけている。この子規の看護に関する見解は、まさに女性に対して「ケアの倫理」の優秀性を認めるものであり、アメリカの発達心理学者であるギリガンの『もう一つの声』⁽²³⁾を想起させる。ギリガンは男性の道徳的な態度を「正義の倫理」とし、女性の場合は「ケアの倫理」と呼んだ。そして、男性優位社会で忘れていた「ケアの倫理」に焦点をあて、その重要性を指摘することにより、女性の社会的地位を向上させた意義がある。しかし、「ケアの倫理」は男女間の伝統的な役割分担を固定させるようなケアの性差はあつてはならない。人間として、「正義の倫理」と「ケアの倫理」のどちらかに片寄るものではなく、両者を調整し、併せもつ存在でなければならない。現代では、看護だけではなく高齢者扶養にしても、家族以外の社会集団や組織に代替機能させる傾向にあり、家族の機能の外部化が進行している。とはいえ、愛情と信頼にもとづく手厚い家族の看護の果たすべき役割は最高のものである。

子規の世界は、まさに身動きのできない「病牀六尺」の空間であり、看護の日課は見舞客の対応の他は、3度の食事と間食の用意、服薬と、脊椎カリエス患部の包帯の交換、便通の処理というほぼルーチン・ワークの繰り返しとはいえ、忙殺されるものである。しかも、五月蠅いハエすらも姿を消している現代の無菌や無臭の状況からは、この「病牀六尺」の空間に子規の体臭とカリエス患部からの膿をはじめとする異臭が充満し、そのなかで看護する律の労苦は、現実の想像をはるかに超えたものであろう。病床随筆から、その時代の、その空間の臭いもできるだけ嗅ぎとらねば、病者たる子規への看護の本当の姿は見えてこないだろう。そして、妹の律の存在がなければ、即ちその献身的なケアがなければ、寝たきりでの創作活動や病床随筆も存在しなかったといっても過言でなからう。まさに律は子規にとって、ケアとQOLの向上を担い、癒しを与える comfort giver なのであった。また同時に、律にしてみれば、子規の生命力を最大限に発揮させ、生活の仕方を尊重し、子規の自己実現を援助するためのケアであったが、病床随筆の共同執筆にあたるといえるような自らの自己実現にも繋がっていたともいえるケアでなかったのではなからうか。

子規が亡き後に、妹の律が兄の看護から自由となったのは、3歳年下であったので32歳のときであった。その後の律の生涯は気になる所であるが、「神田の共立女子職業学校に入り、本科から補習科に進み、三十六歳で卒業。成績もよく勤勉であったため、学校の事務員から教員となり、裁縫の教師として大正十年まで勤めた。昭和になってからは家で裁縫塾をしながら、子規庵をまもり、昭和二年八十二歳の母を見送り、昭和十六年五月二十四日、七十一歳で亡くなった⁽²⁴⁾」という。子規の墓がある東京田端の真言宗大龍寺を訪れると、「その右に母八重の墓、左に妹律が入っている累世墓が、真ん中の升をいつまでも見とるかのように、ひっそりと建っている⁽²⁵⁾」ことを確認することができる。

4. 死に臨む子規 — 最期の子規

キューブラー＝ロス⁽²⁶⁾は『死ぬ瞬間』で、致命疾患の自覚から死に行く過程を、衝撃、否認、怒り、取引、抑鬱、受容というチャートで示した。子規にとっての死への受容とはどのようなものであったのであろうか。子規は明治31年7月13日の河東銓（碧梧桐の兄）宛（芝区栄町十三番）の書簡で、次のように自らの墓碑銘を記し、病状が悪化し激痛が続くなかで、死を覚悟している。

「正岡常規 又ノ名ハ処之助 又ノ名ハ升 又ノ名ハ子規 又ノ名ハ獺祭書屋主人 又ノ名ハ竹ノ里人 伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス 父隼太 松山藩御馬廻加番タリ 卒ス 母大原ニ養ハル 日本新聞社員タリ 明治三十〇年〇月〇日没ス 享年三十〇 月給四十円⁽²⁷⁾」

また、中江兆民は喉頭ガンで余命一年半の通告を受け『一年有半』を執筆し、明治34年9月2日に初版が発行された。子規は『一年有半』について、『仰臥漫録』の10月15日に、

「兆民居士の『一年有半』といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り申候 居士は咽喉に穴一つあき候由われらは腰背中腎ともいはず蜂の巣の如く穴あき申候 一年有半の期

限も大概是似より候ことと存候 しかしながら居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけわれらに劣り可申候⁽²⁸⁾」さらに10月24日には、

「『一年有半』は浅薄なことを並べたり、死に瀕したる人の著なればとて新聞にてほめちぎり⁽²⁹⁾したため忽ち際物として流行し六版七版に及ぶ」といい痛烈な批判を加え、死に臨む人間に対し、理よりも美がいかに大切であるかを訴える。そして、子規は痛哭と呻吟のなかにあっても、決して宗教的な救済を訴えることはなく、宗教とは無縁であったといえよう。

「余は今まで禅宗のいはゆる悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた。」⁽³⁰⁾という。また、

「この頃は左の肺の内でブツ ～ ～ ～といふ音が絶えず聞える。これは『佛々々々』と不平を鳴らして居るのであらうか。あるいは「仏々々々」と念仏を唱へて居るのであらうか。あるいは「物々々々」と唯物説でも主張して居るのであらうか。」⁽³¹⁾という。そして、兆民の『一年有半』を批判した『仰臥漫録』の明治34年10月15日には、

「われらなくなり候とも葬式の広告など無用に候 家も狭き故二、三十人もつめかけ候はば柩の動きもとれまじく候 何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辞伝記の類読み上候事無用に候 戒名といふもの用る候事無用に候 かつて古人の年表など作り候時狭き紙面にいろいろ書き並べ候にあたり戒名といふもの長たらしく書込に困り申し候 戒名などはなくもがなと存候 自然石の石碑はいやな事に候 柩の前にて通夜すること無用に候 通夜するとも代りあひて可致候 柩の前にて空涙は無用に候 談笑平生の如くあるべく候」⁽³²⁾と、通夜や葬式について注文をつけている。

また、子規は明治34年9月21日の『仰臥漫録』で、妹の律への叱責と看護への感謝を記すと同時に、次の句をつくる。⁽³³⁾

秋の蠅 蠅 た た き 皆 破 れ た り
病室や窓 あ た た か に 秋 の 蠅
草木国土悉皆成仏
糸瓜 さへ 仏 に な る ぞ 後 る る な
成仏 や 夕 顔 の 顔 へ ち ま の 尻

ここで、注意すべきは「草木国土悉皆成仏」である。これは大乘仏教の「一切衆生悉有仏性」という、すべての生きとし生けるものが仏になる可能性があるという考えを発展させた、動物だけではなく植物も、さらに石や土にまでも仏になる可能性があるという天台宗の本覚思想である。いうまでもなく、本覚とは一切の衆生に本来的に覺りの智慧が備わっているということ、鎌倉仏教の日本的な展開で重要な要素となり、悪人往生や女人往生へとつながっていく。山水人間虫魚すべてが成仏できるのであり、病床から眺める庭の糸瓜も当然ながら成仏できるのである。子規は「病床六尺」にあつて、果物を写生し、草花を写生する。あるいは、庭に糸瓜の棚があり、糸瓜も写生する。麻痺剤を飲み、激痛を緩和し絵筆をとり「果物帖」「草

花帖」を丹念に仕上げていく。そして、「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分つて来るやうな気がする。」という。「糸瓜さへ 仏になるぞ 後るるな」の一句に子規の死生観が凝縮しているというのは、いささか言い過ぎであろうか。さらに『墨汁一滴』の4月9日には、

「一人間一匹

右返上申候但時々幽霊となって出られ得る様以特別御取計可被下候也

明治三十四年 月 日 何がし

⁽³⁵⁾
地水火風御中」とある。

この表現にも、子規の死生観を窺い知ることができよう。

子規は明治35年の夏を何とか乗り切るが、9月になると足に浮腫の末期症状があらわれ、『病牀六尺』には「我瘦足の先俄に腫れ上りてブクブクとふくらみたるそのさま火箸のさきに徳利をつけたる如し」(九月十一日)となり、「五体すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しき」(九月十二日)となり、さらに「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し」(九月十四日)となった。この9月14日に子規は高浜虚子に「九月十四日の朝」という一文を口述筆記させた。そこには「たまには露でも落ちたかと思ふように、糸瓜の葉が一枚二枚だけひらひらと動く。その度に秋の涼しさは膚に浸み込むように思うて何ともいえぬよい心持ちであった。何だか苦痛極って暫く病気を感じないようなものも不思議に思われた」と、束の間の小康状態となった。子規の臨終を伝えるものには河東碧梧桐や高浜虚子によるものがある。臨終に近い病者には一種の臭気が漂う。まして、大小便を取ることにも不自由である。もはや子規は、外出もままならず、青白い顔と痩せ細った長い手となり、腐った骨は膿として常に流れ、脊髄は壊れ、肺も腐っている状況であった。9月18日の朝、子規はもうあまり口もきかなくなり、画版に貼った唐紙を律にもたせ筆を執った。

糸瓜 咲いて 痰の つま り し 仏 かな

痰 一 斗 糸瓜 の 水 も 間 に あ は ず

を と と ひ の へ ち ま の 水 も 取 ら ざ り き

これが辞世の句である。9月19日午前1時過ぎに、子規は息を引き取った。子規の命日を「糸瓜忌」という。

5. まとめ

本稿で十分な検討とはいえないが、病者の子規を通して、病気と共に生きる人間の姿にせまろうと試みた。人がその本質をもっとも鮮明に表出するのは、その人が病むときであり、死に直面したときであり、その人の生き方を映し出している。誰もが回避できない病苦のなかで、いかに生きるべきか、何を生きがいとすべきかを、子規の生き方から探ることができるのではなかろうか。子規の病床随筆は決して闘病記ではない。今という時を全力で生きているとき、その人にあるのは今ここに生きている現実である。子規は絶えず死を意識したが、今を生きる

ことに精一杯であり、苦痛に耐え、死を選ぶことなく、歌や句をつくり、文や絵をかき、仲間と論じあい、残された日々を全力で生きた。旺盛な好奇心をもち続け、飲食と執筆により生きがいを見つけ出し、苦の中に楽しみを見つけ出したのである。子規に、死の一ヶ月前にあたる明治35年8月19日付けの、茨城県下総国石下局岡田村にいる青年宛の書簡がある。この青年は、のちに小説『土』で名を残す長塚節である。

「只今君ニモロタ大和芋ヲ食イナガラツクヅク考ヘタ。(中略)ソコデ僕ノ考エルニ君ニハ大責任ガアル。ソレハ君ハ自ら率先シテ君ノ村ヲ開カネバナラヌ。学校モ立テルガ善イ。村民ノ子弟ノ少シ俊秀トモイフベキ者アラバ君ハ学費ヲ出シテ東京ヘデモ水戸ヘデモ出シ官位農学校位ヲ終業サセテヤルガ善イ。一家ノ私事ダケデモ忙シイトイウヨウナ能無シテハ役ニ立タヌ。」⁽³⁸⁾この書簡には「君ニハ大責任ガアル」と長塚節に呼びかけ、農村生活の向上を求めた。その文面から病苦を感じさせるものは微塵もない。生気に満ちた言葉を発している。

今では見られない光景となったが、病者は氷枕や氷嚢で熱を冷ましていた。生老病死が病院内の出来事となり、死が隠蔽されている現代において、子規の病床随筆から生々しい苦痛・苦泣あるいは体臭だけでなく、その創作力に瞠目し、病者に寄り添った人々のことも忘れず、病者としての子規の評価を期待するものである。

(注)

- (1) 村瀬学『なぜ大人になれないのか』洋泉社、2000年、p. 3
- (2) 立川昭二『からだことば』早川書房、2000年、pp. 21～30
- (3) 吉松和哉『医者と患者』岩波現代文庫、2001年、pp. 57～61
- (4) 野口祐二『物語としてのケア』医学書院、2002年、pp. 52～55
- (5) スーザン＝ソントグ『隠喩としての病』Susan, Sontag, “Illness as Metaphor” 富山太佳夫訳、みすず書房、1982年
- (6) 野口祐二 前掲書 p. 56
- (7) 『子規全集』第22巻年譜、講談社、1978年、p. 115
- (8) 現在は東京都指定史跡として、財団法人子規庵保存会により管理され、公開されている。現住所は東京都台東区根岸2丁目5-11
- (9) 正岡子規『病牀六尺』岩波文庫、1927年、p. 7
- (10) 正岡子規『仰臥漫録』岩波文庫、1927年、p. 62
- (11) 『病牀六尺』同前、p. 69
- (12) 『仰臥漫録』同前、pp. 124～126
- (13) 『仰臥漫録』同前、pp. 104～106
- (14) 和田茂樹編『漱石・子規往復書簡集』岩波文庫、2002年、pp. 358～360
- (15) 『杉田玄白 平賀源内 司馬江漢』日本の名著22 中央公論社、1984年に『耄耋独語』所収、pp. 350～359
- (16) 小松美彦『死は共鳴する』勁草書房、1996年
- (17) 小松美彦『自己決定権は幻想である』洋泉社、2004年、p. 172
- (18) 広井良典『ケアを問いなおす』ちくま新書、1997年、p. 13 なお広井は、ケアとはその相手に「時間をあげる」こと、あるいは時間をともに過ごすこと自体がひとつのケアといている。

- (19) 『仰臥漫録』同前, pp. 62~63
- (20) 吉松和哉 前掲書 p. 279
- (21) 『病牀六尺』同前, pp. 106~115
- (22) 『病牀六尺』同前, pp. 114~115 なお、幸田文の『おとうと』は、自伝的小説であるが、姉のげんが結核となった3つ違いの弟碧郎への愛惜の情をこめた看病と終焉の作品で、ケアのあり方を考えさせる。
- (23) ギリガン『もう一つの声』Gilligan, Carol “In a Different Voice” 岩男寿美子監訳, 川島書店, 1986年
- (24) 立川昭二『病いの人間史』新潮社, 1989年, p. 101
- (25) 同前, p. 113
- (26) キューブラー＝ロス『死の瞬間』Elisabeth, Kübler-Ross “On Death and Dying” 川口正吉訳, 読売新聞社, 1971年
- (27) 『子規全集』第19巻書簡2 講談社, 1978年, pp. 306~307
- (28) 『仰臥漫録』同前, p. 113
- (29) 『仰臥漫録』同前, p. 121
- (30) 『病牀六尺』同前, p. 43
- (31) 正岡子規『墨汁一滴』岩波文庫, 1927年, p. 85
- (32) 『仰臥漫録』同前, pp. 113~114
- (33) 『仰臥漫録』同前, p. 63
- (34) 『病牀六尺』同前, p. 141
- (35) 『墨汁一滴』同前, p. 86
- (36) 『病牀六尺』同前, pp. 182~183
- (37) 高浜虚子『回想 子規・漱石』岩波文庫, 2002年, p. 99
- (38) 『子規全集』第19巻書簡2 同前, pp. 661~662

(参考文献)

- 『子規全集』全25巻 講談社, 1975~78年
- 前田登美『正岡子規』人と作品2 清水書院, 1966年
- 和田茂樹編『正岡子規』新潮日本文学アルバム21 新潮社, 1986年
- 立川昭二『病いの人間史』新潮社, 1989年
- 福田真人『結核の文化史』名古屋大学出版会, 1995年
- 工藤真由美『正岡子規の教育人間学的研究』風間書房, 1996年
- 鹿野政直『健康観にみる近代』朝日選書674 朝日新聞社, 2001年
- 『伝記 正岡子規』松山市民双書20 松山市教育委員会編, 1979年
- 松井利彦編『正岡子規』作家の自伝21 日本図書センター, 1995年
- 松井利彦編『正岡子規集』日本近代文学大系16 角川書店, 1972年
- 大岡信『子規 虚子』花神社, 2001年
- 『斎藤茂吉全集』第20巻 岩波書店, 1973年 所収「正岡子規」